

布野：ただ今ご紹介いただきました布野でございます。今日は第 2 回ということで、今年の 2 月に『スラバヤ』という分厚い本を出版しました。すべてお話すると時間がないため、今回はその中の 2 つのトピックスについてお話しし、私がやってきた研究の、一番の骨子に当たることを喋りたいと思っています。

お手元にあるかと思いますが、こちらに抜き出しています。カンポンとは、おそらく初めて聞くかと思いますが、インドネシア語、マレーシア語で「ムラ」という意味です。片仮名で書く「ムラ」といっても行政村ではないムラのことで、そのカンポンに **ang** を付けた「カンポンガン」は、「イナカモン」「おまえ、イナカモンだな」という言い方で、インドネシア人はよく使っています。都市などに、そのようなムラ的な居住地ができたため、英語で言うアーバン・ヴィレッジという言葉がピッタリきます。普通は、農村とそこから出てきた、都市が形成され、ムラのようなある種の共同体的なものとは違う、隣に誰が住んでいるか分からないといったアノニマスの先進諸国の都市形態になっていくわけです。発展途上地域では、いろいろな理由がありますが、都市化が急激に進展したということと、オーバー・アーバニゼーション、いわゆる課題都市化により、都市の中に、そういうムラ的なつくりが取り残されるという例もあります。また、ムラから出てきたムラ的な共有地もつくってきました。

最近の中国では「城中村」と言います。城の中の村という言葉があり、各地でいろいろな呼ばれ方をしています。ヨーロッパでは、それをスラムと言ったりしますが、それは少し違う意味になるかと思いますが。要するに、コミュニティの組織が非常にしっかりしてるものがスラムでありその代表例がカンポンということです。

本日はそのカンポンと日本の町内会の仕組みが直接関係しているという話をします。またもう一つ KIP（キップ、カンポン・インブループメント・プログラム）についてもお話できればと思います。昔の都市において急激に都市化したことが原因で、住宅問題や衛生問題等の居住関係を改善するということが世界中の発展途上地域の大きな課題になりました。これは先進諸国の中でも、産業革命が一番進んでいたイギリスのロンドン等でそういう状況が生まれていました。それを改善する試みとして、この KIP が大変、うまくいきました。国連のハビタットという 1976 年に設立した人間居住機構がナイロビにあります。そういうとこの賞や、それ以前のアーガ・ハーン賞という、イスラム圏の建築を検証する賞を取ったり、様々な賞をもらっています。それは結果としてそういうことをしたわけですけども、世界的にも整備手法としては注目されているものであるということです。それを今日は紹介いたします。

スラバヤの中では、主に第 4 章が、メインになります。まず一般的な発展途上地域の居住問題についてお話ししたいと思います。これは大体 40 年ぐらい前の写真ですが、私がすべて撮りました。当時、いろいろな東南アジアの各地域を歩いたわけですが、このような状況でした。ただ、私は戦後 4 年、1949 年の生まれですので、戦時中はもちろん知らないわけですが。子どものころに多少、このような雰囲気を知って育ちました。東南アジアの場合

は、大体木造の住宅ですので、何となく親しい感じがしました。この状況に対して、大体どういう対応策をしてきたかと言いますと、右のほうに a、b、c、d と書いてありますが、ローコストハウスの供給というのは、これは前回も言いましたが、日本の戦後は住宅の困窮者、引き揚げ者がおり、約 420 万戸の住宅不足があり、急激に大量の住宅を作りました。それから戦争が終わったことでベビーブームもあり、たくさん人口が増えました。それから、大家族制が核家族になって、みんな都会に出て来たってということで、たくさん住宅が必要だったのです。それをどのように供給するか、私が出た研究室の先輩がその住宅を設計したというのは前回お話ししましたがそれが 2DK というような、ダイニングキッチン付きの、日本の回答だったわけです。発展途上地域も、まずは住宅の足りない人に住宅を供給するということをやりました。それが a です。

それと b も近いですが、たくさん密集してできた、先ほど見ていただいたような居住地をクリアランスと言います。そこに住んでいる人を全員追い出して、そこに今の公共住宅のようなものを建てるというようなことを、改善事業としてやったというのが b です。日本の場合も、そのルーツは関東大震災後に同潤会という各国の義援金でできた公的住宅供給機関が初めてできます。そのときに、不良住宅地改良事業ということで、日本で初めてアパートメントハウスというものをつくっていますが、そういう発想もやられました。

b と c は同じですかね。

c が、どちらかと言うと KIP というカンポン改善事業です。直接住宅はいじらなくて、道路を舗装したり、要するに、雨が降るとぬかるむため、舗装したり上下水道を完備したり、植栽をしたりというような、最低限の改善をするというようなことも行われました。

それから、ちょっとだけ面白いのが、d のサイト・アンド・サービスです。サイト・アンド・サービスは、日本でいうところの宅地分譲のことで、土地を供給して、自分で勝手に建てなさいというやり方です。そのやり方を、これから説明します。コア・ハウジングと言ったりしますが、スケルトンと呼ばれるワンルームぐらいの家を、骨組みだけ供給して、あとは自分たちで壁をつくったり室内をやりなさいというようなことです。この、c、d という政策は日本では戦後にやらなかったやり方です。

それから、東南アジアを見てみますと、e の移住という、例えば、フィリピンにしてもインドネシアにしても、たくさんの島からなっております。フィリピンですとマニラが大都市になるわけですが、そういう人たちを別の島に移住させることをマイグレーションとかリセットメントと言います。インドネシアも合衆国ぐらいの幅のところに一万数千の島がありますので、そちらに移住させましょうという政策です。人口の直接的減少策にもなります。

それから、都市にたくさん人口が集まるというのに対して、農村部を充実させましょうということで、具体的な住宅としては、ルーラルハウジングというようなことも、共通で行われました。

最後の住宅融資というのは、日本の場合は、住宅金融公庫というのが 1950 年につくられ、

融資施策をしたということです。ですから、先進諸国も似たようなことをやっておりますが、真ん中周辺で違う取り組みが見られたということです。大体 1970 年から 80 年代にかけて、最初の日本と同じように、こういう家をつくったのです。日本に日本住宅公団という組織ができたのが 1955 年で、そのときにつくられた 2DK をプロトタイプにして、前回言いましてように北海道から沖縄まで、同じようなパターンでつくり、それでいいのかということで、第 1 回目はそもそも地域の、伝統的な民家の話をしたわけです。

最初に東南アジアを見て回った際には、日本でつくった住宅よりもバリエーションがありますし、タイにしても、シンガポールは狭い島ですから、高層住宅というのを当初から回答するということでしたが。シンガポールと同じぐらいの人口のマレーシアは、こういう低層の集合住宅を供給するということを。ですから、似たようなアプローチを取ったわけですが、基本的なこういう居住形式は、どうしてもお金がかかり、ロー・インカムハウジングにならないか、あるいは公務員しか入れないという問題が出てきます。要するに、量的に全く足りないという事態が、大体の発展途上地域の問題でした。

それに対して先ほど言いました、宅地分譲といった、サイト・アンド・サービスは、すべて完成した住居です。一戸建ての住居を供給するためにはお金もかかりますし、量的にもカバーができないということで、骨組みだけ先につくり、水道や上下水道などのインフラを整備した上で建築するというやり方が、世界中で行われています。これは東南アジア版で、右のほうは、タイの例ですが、敷地を短冊状に切って、それで右上がワンルームとトイレ、バスが付いているコアハウスと呼ばれるものを、自分で勝手に増築しなさいというやり方をしたのが初期です。日本では、あまりそういうアプローチはされませんでした。

要するに、お金がかかるから、スケルトンだけつくっておいてという、昔はそういう知恵があったのです。農村で住宅を建てるときには、2 階は仕上げずにおき、子どもが大きくなり世帯を構えたら、それを仕上げて使うとか、そういう知恵です。そういう選択は取らなかったわけですが。むしろ、これはスケルトン・インフィル分離と言いまして、加工と内装を分離して行うというのは、後の時代に日本が取り入れようとしたという経緯があります。ただ、日本には法的な誓約があり、仕上げまできちっと決めた仕様でなければ、建築の申請が降りないというのが、しばらくネックになっております。次は、壁の絵になりますが、アイデアとしてはそれと同じ形で、それをコア・ハウジングと言いますが、そういうやり方もしてきてます。

それから、スーラル・ハウジングというのは、これが前回お話した、ルーマアダットと言いますか、伝統的な住宅地域で取れるものを使ってというような試みも 80 年代初めからかなり進んでました。当時の私はまず、それに驚き、刺激を受けました。下の 3 枚は、フィリピンのエコ・ビレッジという建築を 80 年代初期にやっていた図になります。なぜこのような建築を行ったかと言いますと、70 年代にわれわれはオイルショック 2 回経験しています。ですから、今のような気候変動問題の、カーボンニュートラルのような発想は、そのときにもう既に芽生えており、いろんな試みは行われつつあったということです。左上

はオールバンブーハウスで、タイの農村住宅の事例ですが、竹はほぼ東南アジアでは無限の素材で、1年で育ちますので、そういう素材で住宅をつくったらどうかや、上の右2枚目は、これはフィリピンのムスリム用の公営住宅です。日本がホープ計画、建築の専門の方はご存じですが、今の国交省が公営住宅を地域の材料を使って木造住宅で建て替える供給ってというのは、むしろこのような動きより遅れた形で展開したことがあります。

別の建築のやり方として例を挙げると、インフォーマル・グループと言い、今までは国の住宅政策等のレベルでやられてきたことですが、いろいろなグループがあり、これはタイのアジア工科大学、AIT という大学院大学が今でもあり、この先生方のグループが、ビルディング・トゥギャザーと言って、一緒に建てましょうというグループをつくり、基本的にはブロック1個を基にして、こういう集合住宅をつくるという、そんなプロジェクトをやっていました。それから、フィリピンには、こういうフリーダム・トゥ・ビルド、建設の自由というグループがあり、この『フリーダム・トゥ・ビルド』とは、イギリスにいたJFC ターナーっていう理論家が、そのような本を書いているのですが、これは建設資財を市場価格より安く供給したものを使って、みんなで勝手に建てたというものです。つまり、DIY です。ドゥー・イット・ユアセルフの発展途上国版ということで、みんながメンバーに入り、これは日本で言うと「結」と言いますが、真ん中のほうにある親せきや近所の人たちが集まり、建設労働をみんなでやって建てるということです。右の図ですが、日本では「たのもし講」と呼ばれる組織がありました。

今は住宅融資のように銀行からローンを借りますが、「たのもし講」ではお金を出し合い、くじ引きで順番に特定の月や週に少しずつお金を提供していき、くじが当たった人が全部その月は使えるという伝統的な金融の仕組みです。フィリピンの場合は「パルワガン」と言い、インドネシアの場合は「アリサン」と言います。

例えは悪いですけど、今、皆さんの職場で、お金を貯金し、その貯金で旅行に行く等、そういうことはないですか？私がカンポンを歩きだしたころは、例えばミキサー講みたいな仕組みがあり、毎週1,000軒ぐらいが微々たるお金を出すと、1,000軒分のお金が最初にくじで当たった人はもらうことができるという仕組みがありました。たのもし講や無尽と言われるものです。どこの地域でもそのような工夫で、金融の仕組みがありますが、そういうものを使って建てましょうという仕組みがあったということです。

以上のような状況の中で私はカンポンに入りだしました。1979年の1月ぐらいです。もう40年ぐらい通ってます。幾つかの居住地として、アーバン・ヴィレッジと言いましたが、面白いことがあります。

さてここからは行政の仕組みをこちらの図で説明します。

実は、1章は2つに分かれており、主に空間や住宅について記述をすることを、スペース・フォーメーションと言い、これを村落と言います。1回目にお話したことはこの中の5番だけについてです。カンポンというのは、ここに出てきません。コタマジヤというのが大きい都市っていう意味ですが、それに対してカブパテンと言う、郡部、日本で言いますと農

村部と分かれおり、その下にクチャマタンという単位があります。これは全国で約 3,500 あり、都市ですとクルラハンという都市があり、その下にルクン・ワルガと言う、日本語にすれば町内会があります。その下にルクン・タタンガ、隣組と訳せばぴったりかと思いますが。それに対し農村が「デザ」という言葉で表現されています。そのデサという、日本で言うと市町村のソンですが。インドネシアの場合は町という概念がなく、普通のコタとコタマジャという大きい都市の構成になってます。

少しこの辺は、多少アカデミックな話になりますので飛ばしてもよいのですが、実際は、先ほどデサと言ったのが、ジャワと訳されますがインドネシアの中のそこまで大きくはない中心の島の、ジャカルタのほうでは、スنداと表現されるため、ジャワと言わないです。しかしジャワではムラのことをデサと言っていました。そこで、上記以外にたくさん上に書いていますが、スマトラやいろいろな場所はいろいろな呼び方をしていました。その中で、先ほどお見せした、今の行政単位では、ムラに当たるのはデサというのが採用されてるということです。またコタという言葉ですが、コタもデサも、実はインドの言葉であるサンスクリット語です。

コタってという言葉は基本的に「城壁で囲われた都市」という意味です。

デサも地方という意味ですから、これは、インドネシアの成り立ちの最初のベースに、インド化が影響していると言えます。そこで語源を探るとカンボンというのは、西ジャワ地区で辛うじて使われていました。ところが、一般的にカンボン、カンボンとかカンボンガンという言葉はマレーシアの場合はカンボンと言いますと、今のデサと同じ意味であるムラという意味で使われています。『カンボンボーイ』という有名な漫画がありまして、イナカモンという意味ですが、田舎の少年ということです。日本にも翻訳されており、漫画家のラットという方がいまして、出版しています。こちらの図はさきほどのインドネシアと言っても、いろんな民族やそういうのがありましたよということですけど。

さきほど冒頭に書きましたが、実は、そのカンボンという言葉がコンパウンドの語源だという有力説がありました。オックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリーには、そのように書いてあります。このことを、私は歩きだしてから 10 年以上全く知りませんでした。ここに少し赤い字で下のほうに書いてありますが、今でも東京外語大学にいらっしゃる椎野若菜先生という方に、教えていただきました。『「コンパウンド」と「カンボン」：居住に関する人類学用語の歴的考察』という論文があり、そこからこの情報を知りました。ですから、知らなかったことが少し恥ずかしかったです。当時、京都大学にいまして、東南アジア研究所があったのですが、東南アジア研究所の先生方も知らなかったので、恥ずかしさは少し軽減されました。逆に、意を強くしたのは、カンボンについて研究し、いろいろなことを見聞きするということは、コンパウンドですから、世界中の…つまりイギリスでコンパウンドと言う意味は集落のことなんです。したがって、イギリスが植民地化した地域の農村集落というのは、例えば「コンパウンド」と言うアフリカ等です。ですから、そういう言葉に通じるといえます。

で、少し白地で書きましたが、非常にきつい規則がある場合の強制収容所みたいなものもコンパウンドと言うことです。異論もありますが、時間がないので本日は省きます。イメージとしては、この右の図がそうです。あまり皆さんはご存じないかと思いますが、バンテンという大きな都市がジャカルタの西部、今のスカルノ・ハッタ空港の辺りにあります。これはものすごく大きい空港でして、アユタヤが大きいのですが、17世紀ぐらいに、ヨーロッパの都市とは相当イメージが違っていました。例えばヤシの木がたくさん生えており、それぞれ柵で囲われているような地区からなっていて、緑が豊かに囲われた土地にヨーロッパ人が行ったとき、ワーッと人が出てきたと。すごい人数がここに住んでいたというイメージです。今でも都市のカンポンに行くと、ジャカルタはさすがにそのようなことはないのですが、スラバヤのカンポンには、大体門があります。門があり、その地区が囲われているという、居住地のイメージになります。アフリカのコンパウンドというのは、大体そのように周りが壁で囲われているわけですが、都市の中にそのように囲われた居住地ができていて、ということです。このコンパウンドという言葉はもともとインドの言葉です。インドのインパクトが大きいので、東南アジア、大陸部、ミャンマーからタイ、カンボジアまでインドの文化が広がりました。カンボジアでは皆さんご存じのアンコールトムやアンコールワットがあります。あの遺跡はインドの影響を多く受けている建造物です。アンコールワット等を建設した国家はインドの影響を受けたため、そのようなすごい遺跡が残っているわけですが、インドネシアもそれがベースでできています。簡単に一番下に書いてあるのを言いますと、おおよそジャワ島の内陸部にできた最初の国家を、ヌガラとかナガラと言います。それは、皆さんが知ってる例でいくと、ボロブドゥールやプランバナンと言いますが、ジョグジャカルタという地区があり、そこにあった王国のような内陸部の王国をナガラと言い、スラバヤのような北部の沿海部にできた港町＝コウシ＝と言いますが、ポートシティです。これがパサール。これはペルシャ語で、イラン。ですから、原型としてはインドネシアの都市は、インド的なヒンドゥーの体系でできた王国であり、その外交の商業として、公益都市としてパサール都市があるというのが、クリフォード・ギアツという方が主張している類型です。

そこで、カンポンはどのような形態かということについて、このクリフォード・ギアツという方の意見がすごく先達です。アメリカの文化人類学者ですが、思想家でもあります。これはスラバヤから南西に行った架空の都市でモジョコルトと言いますが、マジヤパヒ島王国の首都があった＝トゥローラン＝のさらに南辺りの都市です。その中にタレと言う農村がありました。そこのスタディをしたときに、この図です。少し四角い外空の周辺部に四角い大きな家が点々とあります。これは木造の家です。街路の周辺に大きな家があり、これは石造と彼は書いてますが、＝アンコー＝の部分に木造が密集している、これがカンポンだという定義です。ですから、カンポンというのは伝統的なムラではなく、都市化されたときにできたという説になります。これについては、見解が分かれるのですが、そういうふうに定義したほうがいいということです。冒頭に言いましたように、カンポンとい

うのはアーバン・ヴィレッジであると。そして、それは世界中の共通性のある都市の居住地でもあります、ということです。

・・・・・・なかなかカンボンのフィールドワークの話に行けませんが。これも後から知ったことですが、さきほど説明した一番都市の、カンボンの一番＝カイト＝を RT と言い、インドネシア語読みですと「エルテー」と言いますが、隣組と町内会からできています。これは、実際に日本軍が持ち込んだということになっています。これは事実としてあります。ここで読んでいただきたいのですが、日本が太平洋戦争や 15 年戦争のときに、町内会制度をつくったのが 1940 年です。要するに、これは戦時体制下で、戦争のために向こう 3 年、5 軒から 10 軒と書いてありますが。大阪が最初らしいですけども、そういうものを当時植民地化し、要するに＝大概の人＝が出掛けてった地域にワッと傭耕を伝えて、それをつくらせています。

年数を見てください。1944 年ですから、インドネシアの場合、敗戦の半年ちょっと前のことになります。これは、シンガポールもマニラもすべてそのような制度を導入しようとしています。そこで、実際に隣組やアザという言葉が生まれたわけです。

またアザの組織は、常会という、ローマ字で書いたのを持ち込んでいます。最初、私は不勉強でしたので、半信半疑でした。よく調べると、アメリカの博士論文とか、日本の社会学の先生辺りも、これは当然ということで、導入されたってということです。

ただし、1 年足らずで、日本は敗戦を迎えるため、これは単なる一時的な形だろうと思っていると、実は正式に使われないのですが、RK＝、ルクン・カンボンという組織名で、非公式な組織としてインドネシアが独立してから、スカルノアデル辺りはいろんな役割を書いてありますが、税の徴収から住民登録まで、民間の組織の形で、ずっと存続していたと言われています。なおかつ、1960 年代の地方行政法辺りでも必ずしも正式な住民組織ではありませんでした。

正式に、さきほど説明した住民組織になるのは、インドネシアの歴史的な話になりますが、スハルト時代です。要するにスカルノ政権を倒し、新秩序と言いますが、1960 年代から 70 年代にかけて、そのスハルト政権が倒れるのが 20 世紀の終わりです。1998 年ですか、9 年。30 年ぐらい開発独裁っていう体制が敷かれ、その下部組織として正式に RT/RW というのが位置付けられたというのが歴史的な経緯です。そこで、共同体というのは、ここに二面性という形で書いたのですが、みんなで集まって助け合うという相互扶助です。みんなが困っていたら、その中で都市のカンボンの中で助け合うという側面と、一方で、今は何と表現すれば言いのですかね。日本の今の言葉で忖度（そんたく）みたいなことを言います。例えばスハルトの大統領にみんな投票しなさい、みたいな、強制的な二面性があるわけですけど。カンボン・インブルーブメント・プログラムの、みんなの居住関係をよくしようっていうのは、それはみんなで助け合いという意味で、非常にうまく機能しました。要するに住宅をつくって供給するにはお金もかかるし、量的にも足りない中で、取りあえず衛生環境とか緑を植えましょうとか、そういうことをやってきたというストーリー

一です。

それから、たった1年足らずの間、制度が持ち込まれたからと言って、なぜそれが70年もの間、住民組織として存続するのかというのは、非常に疑問な面もあるんですけど。もともとインドネシアのジャワの伝統的なそういう共同体の組織と、日本が強制しようとした組織体制との間で、ある種の共鳴が起こったというふうに僕は思っています。

日本の場合は町内会っていうのは、GHQが禁止します。それは戦争に協力したからということで、その共同体の、さっきの強制的な側面を大変アメリカは重視して禁止しています。サンフランシスコ条約のときに、それはある程度解除されましたが、その後、日本の町内会がどうなったかというのは、単なる機能的には京都のようなところだと、地蔵盆と言い、コミュニティが強いところもありますが、全国的に言うと、日本の町内会システムは弛緩（しかん）していきました。その日本の町内会組織とインドネシアを比較した本や論文もあったりします。その辺はカンポンを歩きながらいろんなことを考えさせられました。

それで、これは先ほどちょっと説明しましたが、スラバヤの行政区域でして、色が分かれてるのは、これは中区と北区、南区と東区と西と合計で5区からなっております。その中に、先ほど言いましたが、クチャマタン=Kec.と書いてある組織が、31あり、それがまた5つか6つ、まあ10以下ぐらいのクルラハンという地区に分かれてまして、その下の単位が、町内会と隣組です。それで、今、この範囲で人口は三百数十万人弱で、ちょっとイメージができないかと思いますが。最大のクチャマタンという地区内で20万人ぐらいの人口ですので、習志野市より少し大きいぐらいです。一番小さいもの5万人ぐらいです。ですから、カンポンと言っても行政単位としては、日本の市町村ぐらいが、びっしりあると考えてください。

そのような中で、調査し、定点観測してるのが3つありますので、現地がどんなところかというのを見ていただければ幸いです。お手元のQRコードを照らしていただければ、スマホで見れます。私はもう5~6冊目ですが、QRコードを組み込んだ本を作って、これがサーバーに残れば半永久的に映像が書物の形で残るはずですよ。

そのうちの、スラバヤで一番人口密度が高いところだけご紹介できればと思います。

中心部には超高層のホテルとかオフィスビルもあったりしますので、あまりこれだけでイメージ持たれると少し問題ですが。かつてはあまり衛生状態もよくない場所でした。

（町の映像を流す）

あ、これは水です。まだ浄水は、すべてに水道が付いてるわけではなく、水売りから買ったりします。

それで今、地図で見てもらった範囲では100メートル四方、1ヘクタールぐらいですが、すごく細い街路があり、南北が多少、歩けるのですが、東西はすごく細い道で、ほぼ、グリーンがないです。インドなんかに比べるとまだましですけど、ここに1ヘクタール、1,500人ぐらいですかね、1,500人ぐらいの人たちが今でも。40年前からあまり外形や、住宅は変わっておりません。

日本と比較すると江戸の長屋でヘクタール当たり 700 人ぐらいですかね。インドや、例えばニューヨークとかのスラムと言われる部類の密集施設では、2,000 人を超えるぐらいの密度です。平屋でも、これで 1,500 人ぐらいの居住地になります。

今、たまたま見ていただいている定点観測の箇所は、対岸にマドゥラ島という島があり、マドゥリーズがかなり、8 割ぐらいはマドゥリーズの居住していたところです。

おおよそ 40 年程、通っていますが、もちろん大変わりしています。調査すると、前の＝やられた＝、みんなデンといい、「死んだ、死んだ」と言われ、相当大変わりをしています。密度的には現在もこのように一番厳しい状況です。ただし、中にはお金持ちがおり、さっきのような水を売ったりしており、その辺が日本と違うところだと思います。

日本ですと、大体、近所は収入階層や社会的な地位が似たような人たちが同じマンションに住んだりしています。これは居住限定立地階層論なんて言いますが。少し横に入ったらやめようと思っています。中にはこうやってお店があります。井戸があり、井戸は地下水面が高く、海がもの大変近くて塩水が入るため、飲料水には使われません。マンディと言いますが、水浴びや洗い物に使っている水道です。このぐらい狭い道です。これは、おそらく東西に入ってます。・・・・・・これはアイスクリーム屋さんです。後で説明しますが、フィジカル的には非常にプアで、十分ではないのですが、カンポンのコミュニティ (RT/RW) というのは非常にしっかりしています。

それで、先ほど申し上げた積み立て講の仕組みや、ミキサ講とも言いましたが、お金を出し合ってお互いに助け合う仕組みの組織が二十程度あったということです。

あとは、いろいろとドローンで上から撮った町の映像もありますので、今、お配りした中で、おそらく他の地区も見れると思います。

一番左が、一番密度が高く、これはスラバヤの北のほうに、かなり大きな港湾があり、インドネシアの軍港もあります。それから真ん中は、もう都心のかなり良好なカンボンで、むしろ空き家化現象が起こっています。これは、日本の状況をかなり追っ掛けてきてるとも思いますが。それから、右は下町的なところですが、カンボンという町はものすごく多様です。

そこで、いろいろなところで調べ、カンボンという都市村落の特長みたいなことを、私の学位論文にまとめました。1 つは、多様性というのは、3 番目の複合性というものとも関係があるのですが。日本ですと、あんまり考えません。1 番で言うとする、さきほど少し言いましたが、同じカンボンに収入の高い層と低い層が同じ地域に住んでるという、そのような意味です。日本の場合、詳しくは分かりませんが、例えば田園調布という町は富裕層がたくさん住んでおり、もう少し下町になると、木造アパートがあり、木賃ベルト地帯が異なるといった、ある程度のセグリゲーションがあり、住み分けができます。

一方でカンボンの場合はカンボンの中にいろいろな収入階層がいるというのが特性です。

それから、2 番目の全体性と言ったのは、主に職住近接のようなことがあげられます。

要するに、カンボンの中では、よほどのことがない限り、同じ地域で大体全てことが足り

るということです。日本の場合のように 2 時間かけて、都心に通い、家に帰るというような、時間かけて職場から家までを行き来するということはないです。

それから、複合性というのは、プルラリティと言いますが、他民族を指します。これも日本の場合は、あまり感じてこなかったことですが。要するに 80 年代のバブル以降に、それこそイスラムのムスリムの人達やブラジル人、私がしばらく住んでた彦根と言いますか、滋賀も多かったですが、外国人の急需がだいぶ進んでいると思います。いろんな民族とニシュツジュ集団ニが混ざって住んでいるということです。

次に 4 番目が、これは一応、高度サービス社会と言って、屋台文化という表現にしたのですが。先ほどの職住近接と言いましたが、座っていると、とにかく食べ物やありとあらゆるものがある。その屋台に明かりに使うものもあればテロシにランプと、建材やサンダルでも売りに来ます。だから、座ってると、要するにコンビニが向こうからやって来るような。そのようなイメージです。では、どうしてそのようなことが起こるのかというのは、やはり雇用の機会がなく、仕事を分け合い、それぞれが生活していく、という原理が働いているからです。

5 番目は、そういう経済的なワークシェアリングの仕組みとは違い、先ほどから言っている、コミュニティでのお互いの助け合いという仕組みです。これをインドネシアではゴトン・ロヨンといい、みんなで助け合いましょうという仕組みです。これは国税になっています。ですから、日本とは違う文化かもしれません。国のスローガンとして、みんなで一緒に助け合いましょうということです。ですから、日本が持ち込んだ、強制的な町内会システムよりももっと助け合いの精神がある。さき程のルクンつと言う、ルクン・ワルガや、ルクン・タタンガということです。ルクンというのは、調和という意味です。みんな仲良くやりましょうっていうような精神が、伝統的なムラの中にあり、それが現代のスローガンにもなっていますし、逆に言うと助け合わない生きていけなかったっていうことでもあります。急速に都市化したため、日本でいう民族ごとの踊り等が生き延びているのです。

それから、順番に見て行きますが、建築的にプロセスとしての住居というのは、骨組みだけ先に建て、順番に仕上げ、必要に応じてつくっていくと、ぐちゃぐちゃとしたカンポンの居住地ができてきます。

8 番目が面白いのですが、われわれ日本人には所有している土地や、持ち家、借家、借地等何となく近代法所有権の区分が分かれています。聞いても分からない不思議な権利関係がカンポンにはあります。3 カ月程度の賃貸契約がある等、非常に複雑なわけです。

インドネシアもニキンダフニとしての所有関係はしっかりとしています。

していますが、実際にはある種の慣習的な文化があり、例えば入会権とでもいいましょうか、所属しているカンポンで所有してる土地というのが考えとしてあります。

ですから、簡単に地上げができません。それをバツとどかしてマンションに建て替えるにも、大変時間がかかりますし、カンポンのコミュニティがオーケー出さないとそういうことができないという事例が多々あります。

これでほとんどの説明は終了しました。多様性というのはお金持ちと貧困層が同じ地域に入り乱れているという意味で、お金を持っていて、水道を付け、自分の家の前に水槽を持っており、そこで水を売ってる。水道施設のない家は、朝、子どもたちがバケツに水を入れて買っていくというような、そういう収入階層が多様だということです。

それから全体性の話でだすのは違うかもしれませんが、大体、幹線道路沿いには大きなオフィスビルや商店が建ちます。あるいは、オランダが入ってきたコロニアル住宅等の大きな邸宅が並び、その中にさらにぐじゃぐじゃと家々が並んでいるのが、カンボンの形態です。さきほどギアツと言って、ムラの模式図をお見せしましたが、中で大体の生活が完結できるように都心でも、同じ形になっています。

それから複合性は民族ごとだということで、高度サービス社会というのは、とにかく植木や、虫かご、おもちゃは廃品で作って売りに来るといった、上では、建材を売っていますが、バンブーマットを壁材で使ったり、灯油等、そういうのがとにかく売りに来ます。それからカンボンのコミュニティというのは、婦人会、PKK がしっかりしてまして、それが植樹をして、コンクールをするとかです。

これは私の世代だと辛うじて分かります。町内会で映画会をやったりしています。それで左の絵の右の 2 番目ぐらいは、さきほど言いましたように、民族の踊りをやっています。インドネシアでは 8 月 17 日が独立記念日です。日本は 15 日が敗戦記念日ですけど、その 1 週間前は、隣組対抗踊りや、カラオケ大会等をやったりしています。それから下のほうの道路を直すというのは、コミュニティの作業で、右にみえる建物は、立ち退きしてもらわないといけないのですが、これは立ち退き先が決まるまで、工事を止めてる場面です。このようにカンボンではカンボン・コミュニティというものがしっかりしています。

それからプロセス。これは、実例で、下の絵で言うと、二部屋ぐらいの敷地の中に井戸を掘ってあり、S というのが井戸ですが。敷地の中に二部屋ぐらいの家をつくって余裕ができたなら増築していく、という形でカンボンの住居はできています。

一応、間口が狭く奥行きが深い、標準系ができますが、それができると横に増築していきます。これは親せきを呼んでいくというスタイルで出来上がってる、ということです。

一番右側の図は、非常にインプルーブしてきましたが、実は都市全体としては、ごみの問題が残っており、それからスラバヤもジャカルタも、マニラもバンコクもそうですが、フラッディング、いわゆる洪水があります。したがって、地下鉄ができていなかったりしました。最近では技術的に進歩があり、マニラでも地下鉄をつくったかと思います。

それから日本のポンプ会社も現地に行き、排水の仕組みを教えたり、都市全体ではその辺がまだ機能してないという問題もあります。

左側で、先ほど大ざっぱに説明した中で、一番勉強になったというのが、インボリユーションという概念です。これは最後まで出てきますよと、クリフォード・ギアツというかたが発言しています。基は違いますけれども。

ギアツはアグリ・カルチャル・インボリユーションということです。インボリユーション

というのは、エボリューションという言葉があり、エボリューションは進化という意味ですが。インボリューションというのは、似た言葉でインボルブという、内包する、含むという言葉があり、内に向かって進化するという意味です。内向進化と訳します。

アグリ・カルチャル・インボリューション、つまり農業のインボリューションというのは、耕地面積は増えないが、生産性が上がったというのが19世紀のジャワで、それは労働集約的に労働力を投下し、生産力が上がったという意味です。都市についても、ギアツが言い出したわけではありませんが、アーバン・インボリューションとうことは言われるようになりました。具体的にはさきほど言った、仕事を分け合って生きていくということです。別の言葉で言うと、シェアード・ポバティという言葉になります。この言葉はギアツの言葉で、貧困の共有と訳すと、大きな誤解を招く意味になります。

私が90年代に、学生たちにシェアード・ポバティというのは全然のらないというか、何のことだと言う話でしたが。下にした、シェアード・エナジーや、シェアード・リソースや、シェアード・フード、要するに、食糧、エネルギー、今の地球環境とかいうことを考えれば、おそらくピンとくるかと思いますが。

ある都市で、限られた雇用機会があったときに、それを分けていくという今でいう、ワークシェアリングというような原理が、カンポンでは働いてるということです。

大本でインボリューションっていうのを最初に使ったのは、正確ではなく、ゴールデンワイザーという、美術史家です。

美術史家がどういう例で発言したかと言うと、例えばゴシック建築というのがあると、石像です。今みたいに鉄筋コンクリート造がないときに、石を積んで境界、カテドラルをつくったときに高さ競争をしても、ある限界に達します。その倍建てられるということはないので、そうすると高さを競うところが限界に達すると何が起こるかと言うと、細部を豊かにしていきます。要するに、細かい装飾を凝ったり、それを比べだすという、それをインボリューションという言葉で使ったらしく、それをギアツがアグリ・カルチャル・インボリューションや、今は、アーバン・インボリューションですけど、カルチャル・インボリューションといった言葉で、一般的に使われます。そういう原理という、1つの概念でまとめる、カンポンの生活原理というのは、そういうのがあるのではないかということです。

それで具体的には、そういう原理を使って日本のまちづくりや住宅設計に活かすというスモール・スケール・プロジェクトを考案し、小さなスケールから始めたほうがいいのではないかと考えたのが、30年ぐらい前です。そこで、もう少しまとめると10項目程度考えたのが学位論文のところでした。

それでここからですが、カンポン・インプルーブメント・プログラムというのは、基本的にはオランダ植民地時代にさかのぼります。カンポン・フェアベタリングとオランダ語では言いますが、インプルーブメントと同じ意味です。

ただし、戦前期には、オランダ人はオランダ人が住んでいるところにしか興味がなく、そ

こだけインフラメントするという事はやっています。

ですけども、その後戦争があり、独立戦争もあって、インドネシアの場合はほとんど 1960 年代末までインフラには手がついていませんでした。日本の場合は、敗戦したわけですから、ある種のリカバー、高度成長というようなことで、高速道路をつくり東京オリンピックが 1964 年ぐらいにあって、ある種の高度成長へ切り替わったという背景があったわけですね。インドネシアの場合は遅れており、自主的に「W.R.Spratman KIP」というインフラメントを始めたのが、1968 年です。W.R.スプラットマンは人名で、スラバヤ出身ではないですが、インドネシアの国歌をつくった作曲家の名前で、スラバヤで死にました。この政策はスラバヤに住んだ作曲家の名前から取っています。要するに、自治体が最初に取り組んだということです。スラバヤ工科大学にいた、ジョアン・シラス先生が、「自主的に住民たちが始めたんだ」ということ言いました。その後 70 年代に、世界銀行がやってきて、お金を出したことから、その後、いろいろな工夫をしてくれています。これがオランダ時代の、スマランの例ですが、植民地時代にもやってきて、これが 40 年近く前の改善状況で、ごみの状況もこういう状況でした。

そこで、この点々の意味は、部分的に徐々に改善していったということです。図式的に書いてありますが、あるエリアで優先順位を決め、順番に、さき程説明したような舗装をし、上下水道を付けたり、そういう最小限の手当をすることから始めたということです。それが 82 年ぐらいまで続き、ある程度の地域まで手が付きました。

そこで次の段階になり、ようやく 51C、2DK の集合住宅を建設していく話になりました。人口 20 万人ぐらいが 1 つの区ぐらい。世田谷が 90 万人、杉並が 60 万人ぐらいの人口ですから 23 区の多摩地区を入れると、似たような人口規模もしれないです。

最初にやった集合住宅が、日本をモデルにしたのですが、悲惨なことになりました。

なぜかといいますと、積み重なって住むという経験がなかったため、平気で上の階で水浴びして、たらいの水を下の階にぶちまけるということがあったそうです。

これは、スラバヤのど真ん中ですが 20 年程度で、スラバヤ工科大の仲間たちが、建て替えてしまいました。ですから失敗例です。集合住宅モデルというのも 80 年ぐらいから試みました。まさか 51C じゃないでしょうねという議論はしながらですが、少しは変わりました。家は狭いですが、できるだけ共用スペースをつくったというモデルをつくり、何カ所かスラバヤでつくりました。そのスラバヤ工科大のシラス先生のチームがやったというのがあります。

キッチンも 1 カ所にまとめ、共用スペースをたくさんつくるという案をスラバヤでルーマーとソンボと、3 カ所作る試みもやりました。その後どうなるかということも含めてですが。日本の集合住宅と違うのは、ムスリムですので各階に床屋さんやたばこ屋さん等、そういうお店が各階に出ていたり、各階にはムショラと言って、小さなモスクがあるとか、共用スペースでは作業をしたり、当初は結婚式やったり、そういったような集合住宅モデルをつくりました。ただし、だんだんとそのような建築様式にはお金がかかるため、通常の集

合住宅のようになっていきます。

それから、新しいカンポン・インフラ・プログラムの中で、このカンポン・ラワーズというのは、古村、古いムラって意味で、カンポンという意味ですけど。これは、伝統的な子どもたちの遊びや、伝統的なカンポンの料理等です。それから歴史的な、かなりの有名人の家を博物館にしたり、カンポンの歴史を見直す、そういう文化の保存運動の動きも最近は出てきています。

そのベースで、クリーン・アンド・グリーン。あ、これは違ってます。最初が「グリーン」です。「Gr」にしないといけないのですが。＝ヒジュラ・ダンプルシー＝と言いますが要するに、アーバン・ファーミングです。とにかくたくさんのグリーン、要するにハーブや薬草や、ちょっとした野菜なども植えましょうという活動です。これは、スラバヤ市中で始めています。

2 番目は野菜の肥料にするコンポストです。それから雨水を浄化する装置や、右の図は、廃品でつくったドレスやおもちゃです。それを実際に売ったりしています。

これを 31 クチャマタン全体で競わしてまして、年に 1 回大会を開き、どこが 1 番だ、みたいなことを行っています。特に 21 世紀に入りリスマという女性の市長が出るんですが、今年まで任期だと思えます。盛んに新しいことを、要するに、精いっぱいフィジカルな環境を直すという段階から、経済的なコンプリヘンシブ（KIP）と説明しましたが、職業訓練をし、カンポンの収入を上げるというようなことやりながら、今は気候変動問題や地球環境問題についての取り組みをやっています。グリーンを植えると、おそらく体感で言うと 2 度ぐらい、やはり気温が下がった感じがします。都心でこういう試みをしています。

また別の活動としてエコハウスモデルという 1,500 万円程度の集合住宅を作る試みもしました。しばらくの間、スラバヤ工科大学の、寮として使われました。ただし、この住宅は、インドネシアの日本の都市整備公団に当たるブルムナス辺りに売り込みに行きましたが、現段階では高すぎると言われてしまいました。

01 : 25 : 04

90 年代の終わりからこういう活動を通じてある程度の議論はできたかなというふうに思っています。

エコハウスモデルの詳細を具体的に説明しますと、床にパイプを回してるのは、井戸水を循環させ、輻射冷房をするためです。大掛かりなのは、ソーラーバッテリーで、ポンプを回し地下水を循環させ輻射冷房を行います。あとは煙突効果で夜間冷気を上に抜きます。それから、屋根は空気層を取り二重屋根にして断熱をします。それから、ひさしを長く取って日射を遮ります。パッシブデザインと言いますが、そのように、考えられるいろんなエレメントを建築に落とし込んでいます。実はこれは日本でもこのようなモデルです。

大体スラバヤというのは、大阪と同じぐらいの気温です。大阪の夏と同じぐらいの気温で、湿気が少ない分、スラバヤのほうが過ごしやすいのですが、私は京都にいたため、京都の府営の校舎で、「こういうことをやらないか」と言ったことがあります。あまり乗ってもら

えませんでした。日本で本気でこういうことをやったらどうかというのをスラバヤで考えていたということです。

実際は、大元の先生がいまして、小玉祐一郎先生と言い、エコサイクルハウスの日本では第一人者と言われている。その方に、このような指令書をもらいまして、いろんな技術をご紹介いただきました。ここには採用しなかったため掲載していませんが。

例えば、陰からチューブで冷気を引っ張ってくるとかですが、これは近くにそのような森がないため断念しました。いろいろなアイデアが実現しませんでした。例えば、風力発電は、海は近いのですが、海風、陸風程度では機能しないということで、断念しました。右下がデイトライトといい、要するに＝中高＝利用です。この日本でも、とにかくこの照明が電気代をものすごく食うということが分かってます。冷暖房に匹敵するぐらい照明が負担になるため、できるだけ外の光を使おうと考えながらやったのが、このプロジェクトです。

ということで、現在、コロナになって中断していますが、この間も説明したように、私が6年前に日本大学に来てから1年後ぐらいですかね。篠崎先生と一緒に組みいろんな提案をしました。沖縄で調査中ですが。昨日、一緒に授業をしました。建築の、スラバヤとオンラインでつなげながら提案をし、いろいろなことについて一歩先を考えて活動しています。この第4クォーターで今やってる課題です。

これは、スラバヤの側海でして、もともとオランダ時代は、リゾート地で海水浴をやっていました。

現在すごく汚れていまして、かなりごみもたまっています。ここで何か提案できないかと考え、今、案を出し始めたところです。

この範囲ですが、リスマ市長は、「一帯をパステルカラーで塗ろう」という活動を市長自らが現地に赴き行っており、非常に意欲的にまちづくりにおける環境改善の取り組みをしています。私も刺激をずっと受けつつあります。この、リスマ市長というのは、先ほど名前を出したシラス先生のお弟子さんなのですが、そういう活動から、私自身は日本でもこのようなまちづくりというのは応用可能ではないかと考え、ずっと付き合っている次第です。目いっぱいになりましたけど、質問があればお受けします。

以上です。